

---

# 叶雑貨店

零桜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

叶雑貨店

### 【Nコード】

N7497B

### 【作者名】

零桜

### 【あらすじ】

街角にひっそりと佇む叶雑貨店。そこは不思議な好青年が商売をする、不思議で癖になる雑貨店でした。

## 一人目：ノートパソコン

嫌いな学校から開放された帰り道。ふと視線を上げると、ひっそりと雑貨屋さんがあった。

『木村 紗枝』は気まぐれに、その中へと入っていった。

カランカラン

「いらつしやいませ。何かお探しですか？」

「あつこんにちは。えっと、特に何も」

店の主だろうか。20代後半といった様子の好青年がレジでくつろいでいる。

店を見渡すと、いろんなものが並んでいる。その中で紗枝は、小型のノートパソコンに目が止まった。銀色のボディで学生用の学生用の鞆にでも簡単に入りそうだ。

紗枝はそれがとても欲しくなった。しかし、小さくてもパソコンである。高校生である紗枝にとっては、とても買えそうも無い。

「そちらが気に入りましたか」

店の主はそれを手に取り、紗枝の前に持って来た。近くで見ると、ますます魅力的である。使いやすさを一番に考えてあるようなシャープな形といい、色といい全てが紗枝好みである。

「ええ、まあ。でも、私はまだ高校生ですから。パソコンはちょっと・・・」

「これは当店オリジナルですから。少し協力下されば安くしておきますよ」

そう言つて店主は一枚の紙を渡した。

『会社や学校でも嫌な事・物・人を消してみませんか？クリック一つで貴方の楽しい日々が待っています』

「これって一体なんですか？」

紗枝が訝しげに問うと、店主は声を潜めて答えた。

「このパソコンの性能を試したいんです。そこで貴方にこのパソコンをたった1万円でお譲りしましょう。但し返品不可ですけど・・・」

「

「これが1万円!? それで何をすればいいんですか?」

「自分の消したいものを消してくればいいんです。そうすれば自動的に私に分かるようになってありますから。ああお金は後日で結構ですよ」

店主は説明しながら、ノートパソコンを綺麗に箱詰めして、紗枝に手渡した。

紗枝はその箱をなんともいえない表情で見ている。

「一つだけ注意点が、・・・・・・・・・・は決してしないようにしてください」

「はい。分かりました」

紗枝は上の空で店主の話を聞き、店を後にした。

## 一人目：犯したミス

紗枝は家に帰ると早速パソコンの電源を入れた。

（ ）

『 WELCOME KYOUZAKKA 』

オリジナルらしい画面が開き、真っ白な画面が現れた。

紗枝は、デスクトップにある『叶<sup>きまじ</sup>』と書かれたアイコンをクリックした。

其処には、消したいものの入力画面と追加したいものの入力画面が表示されていた。

「わあ。でもこれで本当にきえるのかな？早速試してみよ！」

紗枝はとりあえず、嫌いな数学を消してみることにした。

「学校の数学・・・と」

カチツ

「消えたかな？あつ数学の教科書がない！プリントも時間割にも載ってないし

お母さん、数学がなくなったよ！」

紗枝は思わず母親にそう言った。

「はあ！？紗枝何を言ってるの。数学なんてあるわけないでしょ！そんなもの私達の時代で廃止したでしょ！？可笑しな子ね」

紗枝はこのとき、実感した。あのパソコンは本物だと。

「フツツこれで、私をからかっている人達を消すんだ。そして私の華の高校生活を満喫するんだ！」

紗枝は引き出しから使わないと思っていた学年名簿を引っ張り出した。

「・・・・・・・・・・よしっ！これで全部ね」

カチツ

「これで消えたはず！明日の学校が楽しみだわ。  
あっそうだ消えた分だけ増やさなくちゃ」

次の日

「おはよう」

「ああ、紗枝おはよう」「おはよう紗枝、早いね」  
案の定、紗枝が昨日入力した人物は皆消えていた。  
しかし・・・

「ごめん紗枝。今日の掃除変わって貰える？今から彼氏とデートだ  
から。お願いね！」

「ううん。いいの、気にしないで」

自分にとって不都合なこととは、常に起きるものなのだ。

そしてそれを、人に頼む人も・・・。

紗枝の頭にはあのパソコンのことしかなかった。

カチャカチャカチャツ・・・

「よし、この子もいらぬ。いらぬ。いらぬ。消えちゃえフフ  
ツアハハハ」

甲高い、狂ったような声を上げながら、キーボードを叩く。  
そして電気をつけるのも忘れて、パソコンに没頭する紗枝。  
するとふと顔を上げ、思い出したように呟いた。

「そうだ。あの雑貨屋さんにお金を払いに行かなきゃ。バイトでの  
お金もまだあるし」

カランカラン

「いらつしゃい。この間のパソコン、いかがですか？」

紗枝は上機嫌で店主にお金を渡しながら応えた。

「もう、最高よ！これからはデジタルの時代ね」

「それは良かった。私も良いモニターを持って、幸せです」

「利害が一致したってことね！それじゃあお金は払ったから、また気が向いたら来るわ」

紗枝は満足げに笑いながら、手を振り店を出て行った。

「ええ、お待ちしております」

その後姿を店主が深々とお辞儀をしながら、見送っていた。

数日後・・・

「お母さんつてば最近、顔を見れば勉強勉強つて！私にはそれより大事なものがあるんだから！・・・そうだ、お母さんも消しちゃおう！そうよ、そして新しい優しいお母さんを入力すればいいんだし」

「カチャカチャツ・・・カチツ

「よしっ」

次の朝。

紗枝はいつものように上機嫌で学校に行った。

「みんなお早う」

「えっそうなの？初耳い」「私もだよ！」

紗枝の声に気づいている様子も無いクラスメート。それどころか隣を通り過ぎても無視している。

「ちよつとどういうこと！？なんで、私の好きなクラスになったのに！嫌いな人は皆消したはずなのに！み、みんな消さなきゃ！私の楽しい高校生活を作るの！えっあれっパソコンが無い。そうだ、あの雑貨屋さん」

紗枝は思わず学校を飛び出した。しかし、誰も紗枝のことには気に

もしていないようだ。

カランカラン

「すみません。パソコンを売って下さい！いくらでも買っわ！買うから。ねえ店主さん、ちよつと貴方まで私を無視するの？」

「やあ、いらつしやいませ。とても暗い表情かおをなさっていますが・・  
・どうなさいましたか？そんな貴方にはこのパソコンがお勧めですよ」

「パソコンは高くて、私にはとても買えません」

その店主の目は紗枝の後ろを見ていた。其処には、黒く長い髪の少女が立っていた。

「えっ！？どういうこと！私に売って！この子だって高くて買えないって」

「大丈夫ですよ。お金ならいつでも結構ですから。貴方にこのパソコンを1万円でお譲りする代わりにモニターになって頂くだけです」  
紗枝の言葉など聞いていないかのように続ける店主。

『会社や学校の貴方の嫌いな事・物・人を消してみませんか？クリック一つで貴方の楽しい生活が待っています』

「本当ですか？だったら、買います」

「ありがとうございます。但し注意点が一つだけ。  
決して自分の両親や血縁者を消さないようにしてください」

少女は不思議そうに首を傾げた。紗枝は初めて、自分の犯したミスに気づいた。

「なぜですか？消したらどうなるんですか？」

「縁えにしのバランスが崩れて、貴方の存在が消えてしまうんですよ。ただ消えるだけで、消したものの分だけ生きるのです、生きながらの死の状態になります。ですので気をつけてください」

「わかりました。気をつけます。それじゃあ」

「ありがとうございます」

「あ……あつあ……あ……あ……そつそんな」

紗枝は消えたままのこれからの自分の生活を思った。何人消しただろつ。

ああ消さなければ良かった。

紗枝は今更ながらに後悔した。

「い……いや……いや……いやあああああ」

紗枝の存在を知るものはもういない。

## 二人目：購入（前書き）

文才がなくてすみません！！駄文ですが、読んで頂けると嬉しいです。

## 二人目：購入

私には好きな人がいる。

でも片思いだ。私には勇気がないから、告白するつもりは無い。いや、したいけど、断られたとき、どうすればいいのか分からないのだ。

でもそれも今年で終わる。私は今年の夏に海外へ留学することが決まっているからだ。

留学する前に私は、少しでもこの町を見ておきたいと思った。なぜなら、もし海外で成功したらそのままあっちで暮らすと考えているからだ。

いつもと変わらない商店街の風景。それを私は思い出として記憶に刻み付ける。

「あれ？こんなところにお店なんてあつたっけ？」

私は、小さな雑貨屋さんを見つけた。

いつも何気なく通っていたから、見逃していたのかもしれない。それにこれも、何かの縁だし。

私は、中に入ってみることにした。

カランカラン

店内に心地よい音が響く。

「御免下さいあい」

店内はBGMも何の音もない。それでいて、寂しさを感じさせない空間だ。

「いらつしゃいませ、お嬢さん」

すると店の奥から、低く痺れるような、聞いていて不快にさせない

様な不思議な声と共に、俗に言う、好青年が現れた。

この店の主だろうか。

「何かお探ですか？」

店主は、私の側まで来ると首を傾げて問いかけた。

身長の高い私と並ぶと、その身長の高さが余計に際立つ。

モデル体系とは、こういう人のことを言うんだろう。

「い、いえ別に。探し物というわけでは。今度海外に行くので。その・・・色んなお店を回っていたんです」

「そうなんですか。でしたら、ゆっくりご覧になってください。心ゆくまで、ね」

店主は人好きするような笑みを浮かべて、店内の棚の整理を始めた。私は、店においてある品々を見ることにした。

もし気に入ったものがあれば、買うつもりだ。

縫いぐるみ・・・ゲーム・・・バッグ・・・本まである。

品揃えはとても良いらしい。

ノートパソコンも欲しいけど、安すぎて少しコワイ。

ノート・・・タオル・・・筆記具・・・時計・・・駄菓子・・・パズル。

あっこのパズル可愛い。

私は、雑誌くらいの大きさのパズルを手にとった。

オレンジ色の無地のパズルだ。他のパズルには絵柄があるのに、これだけには何も描いてない。

ピンクのペンが付いているから、自分で好きな絵柄を描けるといいうやつだろう。

値段を見てみると、とても手ごろな値段だ。

「すみません。これ下さい」

「はいはい、パズルですね。良いものを選びましたね、それは一点ものなんですよ。」

そのパズルはね、他にも様々な種類の色があつたんですが全部売れ

てしまつて」

店主はお金を受け取り、パズルを包装しながらそう話した。

そんなに人気の商品なのだろうか。ただの無地のパズルが・・・。

「そのパズルは、色によつてその人の願いを叶えてくれるらしいんですよ。この色は確か…ああ恋愛ですね。そのペンで願い事を書いて、パズルを完成させるといいらしいです。決して途中で止めたり、願い事を変えたりしてはいけませんよ」

私の心を読んだかのように、店主が続ける。

「らしいつて、曖昧なんですか？」

「ええ、私もパズルを買つた女の子達から聞いたので・・・確かではないのですが、まあおまじないの類たぐいだと思つてやつてください」  
「やっぱり、女の子達が言い出したことか。」

でも暇つぶしにはなるかもしれない。

私はそう思いながらも、店を後にした。

## 二人目：願い

家に帰り、私は早速パズルに願いを書くことにした。

恋愛かあ・・・もちろん私は好きな人と付き合っことが出来れば言うことはない。

でも、そんなに簡単に書いちゃいけない気がするんだ。人の気持ち  
を私が、変えるなんて。

結局、願いをかくのに半日を費やしてしまった。でも書けた。我ながら、いい願いだと思う。

それから私は毎日少しずつではあるが、パズルを完成させていった。  
目標は、海外留学の日まで！決めた方がやりがいがあるしね。

完成が近づくに連れて、私の願いも段々現実味を帯びてきた・・・  
気がする。

留学が近づいてくると、私はその準備で忙しくなってきた。そして、  
パズルの完成も遅れてきた。

でも、仕上げないといけない。

一度決めたことは最後までやり遂げたいんだ。

留学もあと1週間と迫った日。

その日はうだる様な暑さで、夏が本格的にやってきたことを知らせて  
いるようだった。

私はあまりの暑さに家を出て、図書館でパズルをしながら学校の課  
題を仕上げていた。家にクーラーはあるが、正直光熱費をあげたく  
ない。

学校の課題も仕上がり、あとはもう習慣化しているパズルを完成さ  
せるだけだ。

2時間後・・・

「完成！！！」

図書館だというのも忘れ、私は叫んだ。周りの人が見てる。

恥ずかしかつたけど、それよりパズルが完成したのが嬉しかった。

良く見ると、文字の部分だけが浮かび上がって見える。造った人が細工をしたんだろう。

まるで完成を祝福してるみたいだ。

次は、買い物に行く予定だ。なにか自分にご褒美を買ってあげよう  
そう思っ  
て石造りの歩道を歩いていると、前を私の想い人が歩いている。

今日はなんていい日なんだろう。

声をかけることもなく、歩いていると車道から車が歩道の方へ迫っている。

彼は携帯に夢中で気づいていない。

(助けなきゃ！！！)

そう思ったとき、私の身体は勝手に動いていた。

「夕那ゆづな！！！」

私は途切れ行く意識の中で、彼の私を呼ぶ声を聞いていた。ああ、  
なんて幸せなんだろう。彼が私の名前を呼んでくれるなんて。

「彼女は願いを叶えたんですね」

哀しそうな笑顔をその美しい顔に湛えながら、青年は独り、言った。

「『あの人はずっと笑顔でいられますように』ですか。いい願いで  
すね、夕那さん」

### 三人目：喫茶店

新人OLである「村谷 真紀」は足早に行きつけのバーに向かっていた。今日、先輩OLに濡れ衣を着せられたからだ。

（あのミスは先輩のせいなのに…）  
とにかむ、カクテルでも飲みながらバーテンダーに愚痴でも言わなければ気が済まなかった。

しかし・・・

「定休日…はあ、ツいてないなあ」  
仕方なく、家に帰って一杯やることに。

しかし、真紀は数分もしないうちにある店の前で足を止めた。

「『かのうざっかてん叶雑貨店』かあ。あつても喫茶店もやってるみたい」  
古びた店の中を良く見ると、店の奥では、お客が数人座って談笑している。

元々好奇心旺盛な真紀は、店の中に入ってみることに。

カランカラン

耳に心地よい音色が店内に響く。

中は意外に広く、棚には雑貨が整然と並べられている。その奥に、綺麗な細工を施された椅子と机が数席設けられていた。

真紀は一番奥の席に座り、店員を待った。机は白いテーブルクロスに小さな花がセンス良く活けてあるが、メニューらしきものは見当たらない。

「いらつしやいませ。ご注文は？」

顔立ちの整った青年が突然、声をかけてきた。

「……………」

真紀は少しの間、青年の美しい容貌に見とれていた。

「お客様？どうかしましたか？」

青年は訝しげな表情を浮かべた。そこで真紀は、青年が店員であることを思い出し、赤面した。

「い、いえ。ここっってお酒とかはないですよね!？」

喫茶店なのだからあるはずもないのだが、駄目元で聞いてみた。

「ごぞいますよ。当店は、お客様の要望にお答えできるようになつておりますから」

そう答えて、青年はニコリと微笑んだ。

「じゃあ、カクテルをお願いします。おすすめで」

「かしこまりました。少々お待ち下さい」

数分後……

「お待たせいたしました」

そう言つて出されたのは夕陽のような色をしたカクテルだった。特に細工もなく、普通といえば普通だった。

真紀はそれを一口、口に含んだ。口の中に甘く、全てのストレスを取り去るような不思議な味が広がり、それが身体を満たした。真紀から自然と笑顔が零れる。

「ふう……おいしい」

「ありがとうございます。どうぞ、ごゆっくり」

そう言つて青年は店の奥へと消えていった。

2時間程ゆっくりした後、幸福な気持ちで真紀は家に戻った。

それから叶雑貨店は、真紀の行き着けとなる。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7497b/>

---

叶雑貨店

2010年10月19日22時41分発行